

保育者養成における基礎実習の意義と実践

山 田 真理子
原 陽一郎

近年の幼児教育学科（本学においては、幼児教育コース、児童福祉・心理コース 定員100名）の学生を見ていると、保育者を志望しているにもかかわらず子どもとの関わりの経験が少なく、関わり方も独りよがりである傾向がますます強くなってきている。また、短大の授業の組み立てからいうと1年次の前期は基盤作りとして理論系科目や一般教養科目が多いのであるが、昨今の学生は、座学が続くとその内容の意義に関わらず集中や興味が持続せず、結果として理解が浅くなる傾向も一般的にみられる。さらに職業訓練の要素の強い短大の学科においては「入学目的」と「今やっていること」が直結していることが興味をもって学習を深めるためには不可欠である。

これらの課題をクリアするために、本学では2001年から1年次の前期に「基礎実習」を幼児教育学科全員に必修とした。「基礎実習」は、全員を2班に分け、隔週で近隣の園において半日実習を行い、翌週すぐに実習の中での疑問を出し合ってミーティングを行うというものである。これは1年に入ったらばかりでまだ幼児教育を十分に学んでいない学生を受け入れてくださる近隣の園との信頼関係を基盤に、学生が実習の中でつかんだ課題を素早く保育理念と照らし合わせて講義を展開する教員との連携があってこそ成果を期待できるものである。保育者養成協議会でも注目されるこの「基礎実習」について学生の授業評価アンケートの結果を添えて報告したい。

I 基礎実習実施概要

1. 実習の詳細

a. 実習スケジュール

基礎実習は、水曜日 1・2 限に実習指導とともに行われる。

5 月下旬実習開始以降は、実習週とミーティング週に分かれ、隔週で下記のように行う。

①実習… 8 時55分、各園前に集合し、11時半まで実習。帰校後レポート記入。

②ミーティング… 2 限：ミーティング（1 限は担当教員は実習先巡回）

b. 実習施設

幼児教育コース：幼稚園を中心に、A、B 班に分けて実習する。

児童福祉・心理コース：保育園を中心に、A、B 班に分けて実習する。

c. 実施期日

事前指導：4 月～5 月（3 回）

各園との事前打ち合わせ：5 月中旬

A 班の実習：5 月～7 月（4 回 隔週）

B 班の実習：5 月～7 月（4 回 隔週）

d. レポートについて

実習レポートはミーティング後提出。ミーティングは両コース合同で行う。

2. 実習事前指導内容（4 月～5 月中旬は事前指導、実習先との打ち合わせ）

a. 実習生としての心得

実習は、授業の一環ではあっても園や園児・園児の親にとってはあな達も保育者である。心得を守れないものは、実習中止とする。

- (1) 実習先に集合となる。遅刻は許されない。
- (2) 服装は自由に動ける服装。保育園は体操服が望ましい。
- (3) 名札を必ずつけること。(事前に指導する手作り)
- (4) ピアスやアクセサリーは子どもをけがさせることがあるので厳禁。
髪の色は子どもに不自然感をもたれるほどのものは禁止。
- (5) 携帯電話はかばんに置いて保管する。ポケットに入れて実習はしない。
- (6) ハンカチ・ティッシュ・帽子を忘れないこと。
- (7) 挨拶・礼儀・言葉使いに気をつける。

b. 実習を行うときの心得

各園で、事前に入るクラスを指定してもらって、実習生の中でローテーションを組み、時間になったら自主的に実習を開始する。

- (1) 子どもたちから学ぶつもりで関わること。(教えてやるなんておこがましい)
- (2) 観察実習が主であるから、自分からあそびを提供したり引っ張ったりしない。
- (3) 分からないことはその先生のすることに学ぶ。さらに分からないことは聞く。
- (4) 子どもの視線にあわせて待機し、子どものあそびの流れを学ぶ。
- (5) 子どもの心の動きに注目し、そっと観察することも大切。
- (6) 子どもはあなたと遊ぶためにいるのではなく、子ども自身のためにいる。あれこれ教えてもらいたがったり、聞き出そうとしない。
- (7) 解決してやるのではなく、解決する力を子どもから引き出すことが保育者の役割。
- (8) 子どもの力を引き出すには待つことが大切。
- (9) 子どもの攻撃には、自分なりの考えを持つ。

- (10) メモはポケットに入れておき、質問や心に残ったことを書いておく。
- (11) ことばかけは、子どもの心を広げ、自信を持つよう支持的な言葉を心がける。
- (12) その他、しかられた時はどうしたらいい？子どもが「あげる」と言ったときは？子どもに弾けない曲を弾いてと言われた…、子どもが蹴ってきた…、子どもにあっちに行けと言われた…、本を読んでやっていたら別の本を持ってきた…、2人の子が同時に遊ぼうとやってきた…、話しかけても返事をしてくれない…など、実際に行ってみるといろいろな困ったことにぶつかる。それらをミーティングで話し合いながら実践で学んでいく。

c. 実習記録

用紙は5月初旬に全期分を配布するので、各自保管し、アフターミーティング毎に提出する。

d. 名札の作成

- (1) 10cm×15cm程度の大きさ。形は自由（ハート形・リング型・ミッキー型など）
- (2) 手触りを考えて、布を選ぶ。地の色と名前の色目は目立つように。
- (3) なまえはひらがなで、マンガ字は禁止。（刺繍またはアップリケ）
- (4) 台は少し綿を入れて1cm程度の厚さにする。（めくれにくいように）
- (5) マスコットの飾りは名前をじゃましない程度。
- (6) 乳幼児用安全ピンを縫いつける。（保育園は縫いつけを指定されることもある）

Ⅱ 基礎実習の授業評価アンケート

基礎実習に対する学生の評価はどのようなものであるかについて、アン

ケート調査を行った。

方法

期日：平成17年7月17日

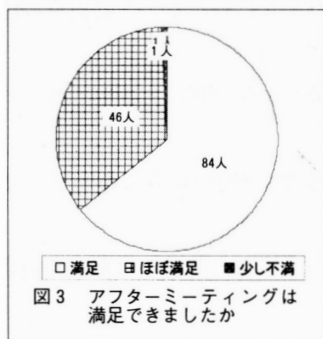
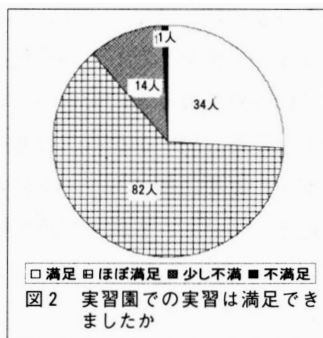
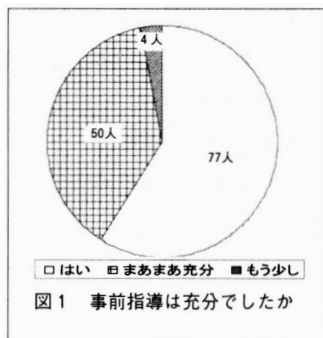
対象：幼児教育学科1年次学生 137名（回答者131名、回収率95.6%）

項目内容：基礎実習について、a. 指導に対する満足度、b. 本学授業
評価アンケートに基づく講義に対する満足度、c. 学生の自己評価
について回答を求めた。

結果と考察

a. 指導に対する満足度

①事前指導、②実習園での実習内容、③アフターミーティングに関
する満足度は、図1、図2、図3の通りである。



このような結果であり、基礎実習の指導内容に対する満足度は非常に高いといえよう。

「事前指導は充分でしたか」に対しては、不満として、「自己紹介の時の工夫・事前の用意」（1名）、「子どもの発達について」（1名）、

「事前の園の保育内容などの理解」(2名)という記述があった。しかし、いずれもその後の学習の中で深められるべき課題であると考えられる。

「実習園での実習は満足できましたか」という問に対し、不満としてあげられているのは、「実習時間がもっと長い方がいい」(11名)、「実習時間がもっと短い方がいい」(1名)、「実習回数がもっと多い方がいい」(6名)、「実習園の保育内容」(1名)であった。もっと実習したいという気持ちが不満として表れているということは喜ばしい限りである。

「アフターミーティングは満足できましたか」という問に対しては、「私もテープに録音しておきたかったです」(1名)という記述があった。

このように、満足度が高いのみではなく、不満の理由もほとんどがより深く実習をしたいという気持ちからであることから、基礎実習自体の持つ意義は非常に大きいといえると思われる。

b. 本学授業評価アンケートに基づく講義に対する満足度

本学の授業評価アンケートに基づいて調査した学生の講義に対する満足度について、5段階尺度で評価した平均点は以下の通りである。なお、()内は、2004年度の授業評価アンケートの全学平均である。

- この授業は、あなたが入学したときに考えていた目標を達成するのに役立つと思いますか。: 4.78 (4.17)
- この授業は、あなたに興味や関心を引き起こしましたか。: 4.79 (3.90)
- 先生の授業の取り組みに、熱意や情熱が感じられましたか。: 4.89 (4.31)
- この授業では、先生はあなたの人格や人間性を尊重していましたか。: 4.31 (3.90)

- この授業を後輩に勧めたいと思いますか。：4.82 (3.97)

このように非常に高い満足度を示した。これは、学生の具体的疑問に基づいて、その理論的背景も含め具体的に講義しているため、わかりやすかったものと考えられる。私どもが通常行っている講義でも、できるだけ具体的な事象に基づいて講義することを心がけてはいる。しかし、基礎実習の場合、質問した学生は自分自身のことであるので、理解が深まりやすいとともに、その問答を聞いている学生も、次週の実習で実践的に理解することができるため、満足度が高くなったものと思われる。

c. 学生の自己評価

学生の自己評価については以下の通りである。

- あなたは、この授業において何かを学び取ろうと努力しましたか。
：4.15 (3.93)
- あなたは、この授業をとおして自分の課題を見つけ出していますか。：4.08 (3.53)
- あなたは、講義のことばや板書をノートにとりましたか。：4.37 (4.28)

このように学生の講義に対する意欲も非常に高いものであった。学生の学習意欲を高める上で、「わかる（理解できる）」ということの重要性とともに、「経験」することが重要であることを改めて示したもののといえよう。

本学幼児教育学科に入学してくる学生は、単に保育士や幼稚園教諭の資格を取得しようとしてではなく、保育士や幼稚園教諭として保育現場で働くことを目標にしている者がほとんどである。それにもかかわらず、実際に「子どもたち」と関わった経験はほとんどない状態で入学してくる者が多いのが実状である。よって、実習は、「子どもたち」と関わることによって、子どもの具体的な事実を把握することができる場であるため、その意味は非常に大きい。そして、その経験か

ら得られた疑問等をできるだけ早くまとめさせ、解決し、今後の学習に活かしていくために、アフターミーティングを行うことが重要となっている。これは各実習においてもいえることだが、特に基礎実習は、実習とアフターミーティングが短時間に、交互に繰り返されるという点において、理想的であるといえよう。

Ⅲ 基礎実習アフターミーティング（質疑応答例）

基礎実習におけるアフターミーティングはいわばライブである。どんな質問が出てきても、その背景をとらえ、学生にとって必要な知識と照らし合わせた学びにつなげなければならない。以下、ミーティングの、学生からの質問とそれに対するアドバイスの様子を紹介する。（ここにあげたのは、1回のアフターミーティングの半分ほどの分量である）

事例1 <片付けは誰が？>

学生：2歳児なんですけど、先生がバーっと片付けをしてて、子どもは片付けていないんです。子どもが片付けるより先生が片付けるほうが早いんでしょうが、「お片づけは…？」ってさせたほうがいいのか？こんな時はどうすればいいんですか？

原：片づけを子ども自身にさせるかどうかは年齢によりますけど、給食の前のおもちゃの片付けに関しては、確かに2歳児だと子どもだけにさせるのはまだ難しいと思います。だから、保育者としては声をかけてあげて「片付けるんだ」っていう場の雰囲気は作りながら、保育者が片付けることでしょう。子どもたちはだんだんそれを模倣していくことによって、2歳半か3歳ころになると『今はこういう風にしなきゃいけないんだ』という理解ができてくと思う。

ところで、君は何をそこで思ったんだろう？『先生がやっちゃい

けないんじゃないの?』って批判的に捉えてるとしたら、それは学びにならないよ。基礎実習はそういう風に批判的に捉えるのではなくて、『先生がそうしている意味は何だろう?』と考えることで見えてくるものを学ぶことから始めてほしい。3歳児でも「やろう」と言っただけでは乗ってこない子も結構いるけど、3歳児では自分で片付けをやる子どもに育つことを目指していく。

2歳児は遊んだおもちゃを片付けるっていうのはちょっと難しい行為だと思いますね。自分がおしっこしてしまったものを汚れ物入れに持っていくというくらいのことはできますから、その辺でその子どもの発達を観察するのもいいでしょう。

山田：今の例で言えば、先生が「今からお片づけするからあなたたち向こうに行っときなさい」といって先生が子どもが見ていないところでバツと片付けちゃったのであれば、これはダメですよ。2歳児は「さあ、お片づけ♪お片づけしようね」とか言ってちょっと遊び半分で「車さんどこかなあ?あ、ここだ!」と言って車の箱のところに置いたりしている先生を見ながら、子どもが『ああ、ああするんだ』っていう風に模倣していくという時期だということです。ですから、先生が片づけしないで「片づけなさい」じゃ模倣はできないから、身につかないということになってしまいます。そしてこれが大事なことなんだけど、片付けも保育の一つです。保育の一つということは、最初は子どもにとって楽しいこと、遊び心でやれることとして体験できるほうがいいです。だから「お片づけしなさい!」とか「片づけなきゃ遊ばせないよ!」とか言うのではなくて、「お片づけ♪お片づけ。はい、この箱に何々が入ったー!」とかって言いながら、『あ、片づけるってなんか楽しいな』と片づけて、「はい、じゃあこのおもちゃさん達は棚でお休みねー」とか言って「おやすみー」とか言って『このおもちゃ

達は遊び終わったんだな』っていうような、そういうイメージと
いうものも必要ですから、そこも心がけておくといいと思います。

事例2 <先生から離れず泣いている子>

学生：1歳児ですけど、保育園に来てからずっと泣いてる子がいて、先生が離れた時に私の所に来たんですよ。それで、泣いてたから抱いてあやしたりしてました。でもちょっと床に座らせたりすると、ずっと泣いてて、ずっと抱っこしてる状態になってしまっ。そういう時はずっと抱っこしたままでよかったんでしょうか？

山田：ずっとってどのくらいだったのかな？

学生：給食が始まる前ぐらいまでずっとぐずってて、ずっと泣いてて、外を指差して「ママー、ママー」って言ったり、「ちょっと疲れたから座らせて」とか言って座ってる間もぐずってて、おもちゃが周りにあったから「これで遊ぼうか」という感じで降ろしたりしたけど「嫌だ」と言われて、結局ずっとでした。

山田：1歳どのくらい？1歳何ヶ月くらい？歩いてる？ヨチヨチ？

学生：普通に歩いてました。

山田：上手に歩いているなら1歳半は過ぎてるかな。「ママー、ママー」の他にはどんな言葉を？

学生：ずっと「ママー」しか言ってないです。「ママー」って言ってずっと泣いていました。

山田：あなたに抱かれてる時はあなたにベターっと寄りかかってくる？それとも抱いたときに体がこわばってる？

学生：寄りかかってくる感じです。

山田：寄りかかってくるのね。わかりました。このように、月齢や抱かれ方によって、この「ずっと泣いている」という状態をどう判断するかが違ってくるのですよ。それと、いつからその子は入園してるか、つまり、この4月から入ったばかりなのか、0歳の頃か

らずずっと来ているのにそうなのかっていうことによってもちよつと違いますよね。

さて、この「親から離れて不安になって泣いている状態」を『母子分離不安』って言います。お母さんと離れがたい、離れたくないということです。そういう子どもはどこの園にもいますし、もうちょっと前の4月ころなんか保育園の新入園児とか幼稚園の3歳児は全部が母子分離不安みたいなもんですよ。あちこちで「ぎゃー」「え〜ん」とか泣いててね。それはある意味当たり前のことです。それまでずっとお母さんと一緒にいて、お母さんに守られてて『お母さんと二人』という世界から、お母さんのいない時間を他人と過ごさなきゃならない環境に入っていくわけですから、保育者にとっては『ああ厄介だなあ』と思うかもしれないけど、『その子にとっては当たり前よね』って、まず思ってください。

そして、母子分離不安がちゃんとできていることはお母さんとの関係がある程度ちゃんと育っているということです。『お母さんがいい』っていう関係ができているってということです。「お母さん、お母さん」って言ったりしている時とか、あなたに抱かれた時に体がこわばってる子の場合は、お母さんへの愛着より場への不安のほうが強いつてことかもしれない。でもこの子はあなたにベタッとくるってことだったので、お母さんとの愛着関係はちゃんとできてる子なんだなって思います。ただお母さんがいなくて寂しい。そしてここにいることにまだあんまり慣れてないという訴えなのかなと思うんですね。そしたら、その子が落ち着かないうちにこちらが無理やりに何かで遊ばせようとすればそれは余計不安になるわけだから、その子が「ママがいい。ママー、ママー」って言っている時はそれは当たり前なんだから、「当たり前だよ。ママの代わりにはなれないよね。でも寄っかかってくれるん

だったら、ここでも落ち着けるといいよなあ」っていう気持ちであなたが守ってあげる。そして他の子とかをチラッと見た時に、「あ、あれも面白いなって思ったかな？」ってその子の気持ちの動きにこちらが半歩遅れくらいでついていってやる……という関わりをしてほしいですね。そうすると、その子にとっては安心できるわけです。自分に無理やり嫌なことをさせない場所、怖いことををしない場所という風にその園の認知ができれば安心できるわけです。

でも、「ここで遊ぼう。あれをしよう。」とか「お友達が遊んでるから、あっち行こう」とか強制されると、そういう風に自分に怖いことをさせる場所だ！ってなってしまって、余計その母子分離不安が長引くことになります。「不安な子をそのままにしておいていいんですか？」って思うかもしれないけど、不安な子を無理やり何かをさせれば余計不安は強くなるから、そのままでいようとする時間は長引くと考えてほしい。逆にしっかりと安心するまで守ってやるほうが、結局次のステップは早い。それが2日も3日もずっとお昼も食べないでお昼寝もしないってなるとそれは心配だけれども、朝登園してからおやつぐらいまでとか、お昼ぐらいまで泣いていても、食べるものが出てくれば何となくチラチラと食べるものに関心がいくぐらいであれば、まあ様子をみて「安心感を持つほうを優先してあげる」ということが大事なと思います。

原：新規入所の場合は1～2週間ぐらいはそういうことが可能性としてはある。それをあらかじめ親に言っておいてもいいですね。それ以上になるとちょっと個別の判断がいるかなあ？

で、もう一つ皆さんにお勧めするのは、泣く子どもとの関わりをいっぱい体験しておいてほしいということです。託児のバイト・ボランティアなどを積極的にやると面白いです。託児、例えば子

ども劇場や市民劇場がお芝居を見る時、3歳未満の子どもを親達から離して、託児室ってところで託児するわけです。その時は、みんな母子分離不安の子どもたちです。みんな不安で泣いている。そういう中で2時間過ごさなきゃいけない。そのうちに遊びだす子、ずっと泣いている子、その親が迎えに来たときの子どもの反応を体験しておく、と、すごく大きな経験になります。そういうバイトとかボランティアに積極的に行くといいかなと思います。学校で勉強するだけでは足りないと思いますから、いろんな事をやってほしい。子どもにまつわることはどんなことでも勉強です。よい保育者になるには大学だけでは足りないです。

山田：2年間はあつという間なので、できるだけ食欲にいろんなことに食いついてください。

事例3 <自分でできることは…>

学生：2歳児だったんですけど、私の所に「先生、はなが出てるー。取ってー」って来たんです。私はその時取ってあげたんですけど、その後にもまたその子が来たんですよ。その時に担任の先生は、「自分で取れるやろ」って言ったので、『ああ、その子は自分で取れたんだ』と思って、私はしてあげなかったんです。「自分で取ろうね」って言って、ティッシュ箱のところまで連れて行ってあげたんですね。そしたらそこにいた別の先生が「おいでおいで」って言って、その先生が取ってあげたんです。先の先生は「自分で取らんね」って言ったのに後の先生はしてあげていて、この子にはどうしたほうがよかったのかな？と。

山田：本当はどっちが良かったのかはその子の発達を見てみないと分からないですけど、実際にその子がどれくらい取れるのかなというのは、結局どっちも見られてないんですね。だから分からないのですが、2歳ぐらいだとその辺の基本的な生活習慣をトレーニング

する時期ではあるでしょうね。だから先の先生が『そろそろちゃんと自分で取らせなければ』って思っているということも分かるし、その後の先生はそこまであんまり思わないで『おや、出てる出てる』というような感じでしてしまったのかもしれない。その辺は、どちらが担任なのかにもよります。担任というのはその子の育ちをちゃんとつかまえて援助の加減を決めているはずですよ。例えば靴を履かせる時でも、この子は今の時期は、「がんばって履こう」とっていう声をかけるっていう月齢にきているなと考えて、今月からはこの子には靴を履かせないっていう思いを持っているかもしれないけれど、他のクラスの先生だったりすると、『あ、何々組さんはまだ履かせてやっていいや』と思って履かせてやってしまったりという指導なのでこぼこが生じてしまうことがあるだろうとは思います。だからもう一回その子が来た時にあなたが『この子は実際には自分でどのくらい取れるのだろう』と観察した上で、どのくらいの補助が必要なのか、ティッシュのところまで連れて行けばいいのか、ティッシュを取って鼻のところまで置いてあとは自分でこうやって持たせたほうがいいのかと、「その子から教えてもらう」ことです。保育は生もので、いつも臨機応変。誰にでも当てはまることとか、どんな時にも正しいこととかは保育現場ではめったにないのかもしれない。常に『その子に学ぶ』ということを心がけていくといろんなものが見えてくるものですよ。

事例4 <実習生に命じる子>

学生：5歳児の子で、折り紙をしていて、一人の子が〇〇をしたくって剣を作ってそれを着けたいって言って、糊が遠くにあって、糊とハサミが欲しいって言って、だけど自分では取りに行かずに「先生取ってきて」って頼まれて、「一緒に行こう」って言ったら

「嫌だ」って言って、そういう時はどっちにしたらよかったのか…？

山田：どっちにしたの？

学生：一緒に行って、糊は私がつけました。「僕はしたくない」って言ったから、糊は私がつけたけど、結局子どもは自分では糊はつけませんでした。

山田：糊を取りに行くのは一緒に行ったけど、糊をつけるのはその子はしなかったということね。今二つ問題があるね。一つは子どもの命令にこちらがスッと従うべきかどうかってということと、もう一つは糊っていう素材がその子にとって苦手なのかもしれない、それに対してこちらはどうか考えたらいいのかってということ。ここでは、二つの問題が同時に出不されています。

まず、子どもが「あれ取ってきて」とか「持ってきて」っていうような命令を実習生にするときにどうしたらいいかということですが、その時には、一緒にしようっていう風に返すのが原則だね。で、できるだけ一緒にすること。あるいは実習生だからこの園のことがよく分かんないから、例えば砂場において「水持ってきて」って言われた時に、水を砂場に入れていい園なのか、入れてはいけない園なのか分かんなかったりするじゃないですか。だからそういうのは全部子どもと一緒にする、という方向で再提案をする。だから「一緒に行こう」って言って「嫌」って言われて、「でも一緒に行ってくれないと分かんないよ？」って言って一緒に行ってもらっていいと思う。それでも行かなければ、じゃあ行かない。あなたが自分で行きたいことじゃないのであれば、行かないよ。って5歳児だったらそこまで言って分かる。

もう一つ、その子が糊を最後まで扱わなかったっていうことは、糊のべたべた感に対してこの子は嫌な感じをもっているのかもしれない。それがあるから最初から取りに行くのも人に頼んだのかもしれない、とそういう風にも考えられますよね。そういうべ

たべた感とかぬるぬる感に対して拒否的な気持ちがある子に対しては、保育全体で考えていかなければならない。例えばこれから水遊びが始まった時にどろどろ遊びができるかとか、あるいはボディペインティングとかフィンガーペインティングがこの子ではできるんだろとか粘土遊びはどうなんだろかっていう風に、全体的にこの子がいろんな複雑な触覚に対して、どのくらい感覚が開かれているんだろとか、あるいは開かれていないんだろかを見ていただきたい。

ぬるぬる感がダメなタイプの子は、触覚が閉ざされているというか、触ったりとかぎゅっと抱きしめられたりとかっていうことが苦手な子がいます。そういう子は幼い時からしっかりと触ったりこすったりさすったりしてもらっていない、ということが想像されるので、そうすると糊を扱うか扱わないか以前に、手をつないだりとか触ったりとかさすったりとかあるいはポンポンポン、ぎゅっぎゅっぎゅっ……みたいな遊びができるかどうかというようなこともちょっと確認しながら保育しなければなりません。そういうことができないのであれば、そこまで戻って触りっことかさすりっことか、もももごっこみたいなものからしていかないと、いけないことになります。「糊は自分でつけなさい」って言ったって、それだけではダメなんです。

糊を扱わないあとか粘土を扱わないあとかっていう時にはその辺のことまで考えてみて、この子は触るのは大丈夫だろうか、手をつなぐのは大丈夫だろうか、っていう風に見て、「あ、この子は手をつなごうとすると払ったりとか苦手だなあ」ということになれば、この子は触覚防衛、触ることへのガードがちょっと固すぎる子かもしれないので、それはもう保育上そういうケアが必要な子とっていいかもしれません。

事例5 <別々の子どもに呼ばれたら？>

学生：4歳児だったんですけど、自由保育中に1人の女の子のシール貼りを手伝っていて、もう1人男の子が「こっちに来て」って私を呼んだんですよ。そして、女の子のシール貼りがもうすぐ終わりそうだったっていうのもあったんですけど、男の子に「もうすぐ行くからもうちょっと待っててね」って私が言ったんですけど、もし他のことでも別々のことで私が園児に呼ばれたりした時の対処法が分からなかったです。

山田：分からないよね。体1つしかないもんね。でも、複数の子どもたちが実習生1人に、「遊ぼう！」と誘ってくるっていうことはよくあります。このことへの対処は年齢によって少し違います。未満児であるとかあるいは3歳児のまだまだ前半の時期だったら、実習生が決定権をもって今やっていることを優先して「ちょっと待ってね」とか「これが終わったら行くよ」と言うことも必要だろうと思います。ところが3歳の後半から4歳5歳になったら、子ども自身に考えさせることが重要になります。「自分の体は1つしかないけども、今何々ちゃんと何々ちゃんがこういう風に言ってきて私どうしたらいいか分からない」と、ちゃんと子どもに悩ませよう。「どうしたらいいと思う？」「どうしようかな？」そしてそれまで遊んでいた子がなんて言うか分からないし、あとからやってきた子がなんて言うか分からないけども、子どもたちにそういういわばトラブルの状況をどう解決したらいいのかっていうことをちゃんと考えてもらう…という時間にして下さい。そのためにはあなたが「えー、どうしよう？困ったなあ」って、「今これしてるんだけど、遊ぼうって言われた。どうしよう？」ってちゃんと二人に返してやることです。そうしてやることで二人は考え始めます。で、考えるけど、すぐに解決するわけじゃない。この辺が保育はライブで面白いところです。いろいろな学んでく

ださい。

事例6 <戦いごっこ>

学生：子どもたちが戦いごっこをしていて、事前の打ち合わせの時に「戦いごっこはダメだよ」という注意をお願いしますと聞いていたので、「ダメでしょ」と言って「叩かれたら痛いでしょ」と言っていたんですけど、止めないんですね。4歳児の男の子同士だから、かなり力も強かったみたいで、ドンってぶつかってパンチキックして、「痛い！」って聞こえたんで「ほら！」って思って「ほらおいで」と言ったら来て、「痛い痛い」とずっと言っていたんですよ。「どこが痛いね？」って言っていたら今度はバンって蹴ってくる。で、そこからまたケンカが始まって。しばらくして「落ち着いたね？」って私が言ったら、「痛くない」と言って、でも痛そうにはしてたから、「もう大丈夫？」って言うから、「痛くないって言いようやろ！」って私に怒ってきて、私はこの子にどうしたらいいか分からなくて担任の先生に報告だけしました。

山田：はい、あのね、その園で戦いごっこ禁止しているわけよね？で、じゃあ戦いごっこを禁止するんだったら、戦いごっこで発散するべきエネルギーを発散する遊びとして何を提供しているのかなあ？それをしてないままで禁止されたらそれは抑圧、抑えつけだよ。で、実習生であるあなたがそれをそのまま鵜呑みにしてそのパターンで行くから、子どもにとっては抑圧者が来たってだけだから、「こんな大人いらんぜ」ということになってしまったんだろうと思います。

で、その園で例えば「戦いごっこを禁止してください」と言われた時に、「禁止する代わりにその子たちのエネルギーはどういうかたちで発散させてあげたらいいんですか？」って聞けたらす

ごいけど、多分一年生だと聞けないよね。でもそういう気持ちを持ってほしい。つまり、その子たちが戦いごっこをしているということは発散されるべきものがあるということで、「戦いごっこダメ！」って言ったからには、「その代わりにこれをしようや」っていうものがあなたたちの中になくちゃダメ。しかもその戦いごっこで発散するような遊びの提供が必要。「その代わりに折り紙折ろうや」ではダメですよ。エネルギーを外に発散するような何をするのか。あるいは友達同士で戦いごっこしたらどっちかが怪我してどっちかが痛いって言うんだったら、男性保育士なら「俺にかかってこい！」って言って受けてやって、相当叩かれてもお腹か尻にあざができる程度で、1週間か2週間の間あれば治るさ…くらいのところで受けてやるとか。そういう風に「代わりに何が自分たちは提供できるのか」っていうこと無しに禁止するっていうことは、子どもたちのエネルギーの行き場を失わせるだけですから、子どもたちは隠れてやるか、その抑圧者が来たら「大丈夫」って言ってごまかすかしてるんだろうと思います。

だって「痛い」って言ったらは怒られて「だから止めなさいって言ったでしょ」っていう言葉が出るのを子どもたちは4歳ぐらいなら分かっていますから。だからもうこの人には「痛い」って言わない、「だから言ったでしょ」「ほらみろ」って言われるに決まってると思う人には言わないんです。

もっともっと考えなくてはならないのは、子どもたちの遊びとして戦いごっこしかないということです。そのことはすごく痛ましいですよ。今の男の子たちが特に戦いごっこしか遊びがなくなってしまうということに対しての問題意識は、その園は一定あるんだろうけども、その他のものを提供できていないから戦いごっこが止まないのだと思う。だったら何が必要なのか、ということをお前さんも考えておいて下さい。この戦いごっこの問題って

いうのは、これからどんどん大きくなっていくと思うのです。11月の実習になれば当然皆さんの目の前で戦いごっこが展開されて、そして誰かが泣いて、みたいなことがあるのね。それはそのままに放っておいていいものではないんだけど、だからといって禁止すればいいってもんじゃない。じゃあその代わりにあなたたちはどういう保育を展開できるのか、どういう保育を提供できるのか、ということが問われるんですよ。で、自分ならこういう遊びを提供してその子たちの「発散したい」「暴れたい」そして何か「戦って自分が勝つ」というような達成感とか優越感を自分が物にしたい」って思う気持ちを別のどういう遊びでやれるのか。それを考えておく必要があると思います。あるいはこの実習で次に行くまでに考えてから行ってください。で、今度戦いごっこを見た時には、でもその園では戦いごっこは止めなきゃいけないわけだから「代わりにこれしようぜ」って、私だったらこうしようっていうものを持っていけるようになるといいと思います。

原：で、男子学生行ってるよね？その園に。男子学生を生贄にするってこともありだよな。「あのお兄ちゃん叩いてきていいよ。」って。「お友達すぐ泣くねー。好かんねー。あのお兄ちゃんだったら泣かんよ。行っといで。」「あ、お兄ちゃんがおった！行けー！」って。いや、だいたい君たちの役割ってそんなもん。男子学生は上から乗って潰されるぐらいのことはしてこい。

山田：実際ね、今父親にそういう体ごと遊んでもらうっていう体験のない男の子たちがいっぱいなんですよ。原先生みたいに、体ごと子どもと遊んでくれるような父親なんてそうざらにいないわけだから、もう希少価値だから。そしたらあなたたちは希少価値の男の一人だから、本当に体ごと遊んでやる対象として思い切りそこで存在してください。

まとめ

現在、基礎実習は、入学初期に保育者としての自覚と規律を身につける機会であると同時に、より深い子ども理解を促すものとして機能しているものと思われる。今後は、この質疑応答を1回限りのものとせず、資料やテキストとして一般化して配布できるものとしたい。また、さらに入学前の学生の対人関係の体験の希薄さを補いうる方策はますます必要となるであろう。

